



学校だより

(5月号) 令和4年4月28日発行

<http://shibiraki-e.saitama-city.ed.jp/>

【学校の教育目標】

- ◎ 夢 (ゆめ) にむかって ともに学びあう学校
 - ・すすんで勉強する子
 - ・自分からあいさつのできる子
 - ・仲よくたすけあう子
 - ・じょうぶな子

《今月の生活目標》 時間を守ろう

ザリガニの脱皮

～子どもの成長に必要な安全基地～

校長 白石 徳一郎

ハナミズキの優しい白とピンクが心を和ませてくれます。少しずつ若葉に包まれていく様子を見ると、一日一日の変化は小さくても、季節は移り、子どもたちも同じように成長していると感じます。

さて、今月は子どもの成長について、ザリガニの脱皮から考えてみたいと思います。ザリガニは成長するときに脱皮をしますが、脱皮をした後は体が柔らかく、他のザリガニから攻撃を受けると命を落としてしまいます。自然の中では巣穴等に隠れることで身を守っていますが、飼育ケース等で複数のザリガニを飼育する場合には、飼育ケースの大きさとザリガニの数を適正にすること、それぞれのザリガニが身を隠せる場所を作っておくことが大切です。しかし、脱皮が命を危険にさらすのであれば、脱皮をしなければいいとも思いますが、なぜ、ザリガニは命をかけてまで脱皮をするのでしょうか？それは、殻を脱ぐことで体が大きくなるので、成長するためには脱皮をしなければならないのです。ちなみに、ザリガニは脱皮が近づくとき殻に含まれるカルシウムを血液に溶け込ませて頭の中の目の後ろあたりに集め、脱皮が終わると集めたカルシウムを全身に戻して殻を硬くしています。江戸時代にはそのカルシウムの粒（胃石）を薬として使用していたそうです。

4月に子どもたちは入学や進級で環境が変わり、緊張した毎日を過ごしてきたことと思います。少しずつ新しい環境にも慣れ、友達もできてきたことと思いますが、仲のよかった友達とクラスが変わり、新しいクラスに慣れるまでは「前のクラスがよかったな」と思う子も多いことでしょう。これはザリガニの脱皮と似ていて、脱皮の直後は弱く、ちょっとした攻撃にも大きく傷ついてしまいますが、やがて殻が硬くなり、強くたくましくなっていくと外からの攻撃にも耐えられるようになります。子どもも入学や進級をすると緊張し、前はできたことができなくなったり、体調を崩したりしますが、慣れるまでの辛抱です。子どもが疲れていたら、ゆっくりと心と体を休めてあげて、話に耳を傾けてあげてください。頭をなでてあげたり、足をマッサージしてあげたり、子どもが安心するような言葉をかけてあげたりするといいと思います。親が新しい学級への不安や心配事を口にしたり、あまり神経質になると、子どもも不安になったり、ますます具合が悪くなったりします。親の言葉は魔法の言葉で、親が「大丈夫」「心配ないよ」「運がいいね」「よかったね」などと言うと、子どもも「そうかな？」と思えるようになりますので、よろしく願いいたします。

ところで、子どもの成長には安全基地が大切だと言われます。アメリカの発達心理学者メアリー・エインスワースは、子どもは母親といることに安心感をもつだけでなく、母親がそばにいても次第に安心していられるようになる働きを「安全基地」という言葉で表現しました。子どもは一歳半を過ぎる頃から徐々に母親から離れて過ごせるようになり、三歳ごろまでには、一定期間であれば母親から離れていても、さほど不安を感じることがなくなり、母親を主たる愛着対象、安全基地として確保しながら、活動拠点を広げ始めます。母親がいなくても、それに代わる存在などがあれば同様です。このことは、大きくなってからも基本的に同じで、安定した愛着によって、安心感、安全感が守られている子は、対人関係でも積極的にとりくむことができ、外界のストレスにも強いそうです。安全基地とは安心感を回復させてくれる存在であり、一言で言えば、どんな時でも「大丈夫だよ」と言ってくれる存在です。安全基地の基本的なスタンスは共感的な応答で、相手が求めた時に、相手の気持ちに立って応えるということです。小さいうちは、できるだけ子どものそばにいて、子どもに応じてあげることが、子どもにとっては何にも代えがたい愛情の賜物になります。本人の気持ちや考えを受け止め、整理し、ときには、こういう受け止め方もできるのではと提案したりしながら、少しずつ新たな視点へとたどり着くのを応援できるといいと思います。

子どもが失敗したり、自信を失ったりしている時には、優しく手を差し伸べ、励ましてあげられたらと思います。学年が上がると、「〇年生になったんだから、もう自分でやいなさい」と、ハードルを上げることがあるかもしれませんが、子どもは環境が変わり、新しい人間関係の中で緊張していますので、上手に励ましながら、愛情たっぷりに育てていくことが大切なのだと思います。この時期は、環境の変化で登校を渋る等、心配な様子や行動が見られることがありますが、ほとんどのケースでは、しばらくすると慣れて登校等ができるようになります。心配で子育てに悩まれることもあるかと存じますが、あせらず、愛情をもって、粘り強く接することで、きっとよい方向に向かうと信じています。

最後に、ザリガニの飼育についてです。令和3年10月、環境省の中央環境審議会小委員会がアメリカザリガニの販売や野外への放出を禁止する答申案を了承しました。飼育や譲り渡すことは認められるとのことですが、早ければ2023年にも規制が始まる可能性があるそうです。アメリカザリガニは身近にいて小さい子でも釣ることができ、丈夫で飼育が簡単なこと、脱皮をするなどの変化もあることなどから、生活科の教科書にも掲載され、身近な生き物を飼育する学習の代表的な存在でした。ザリガニの飼育から学ぶことは多くありますが、今後は生態系への影響が深刻であることも学習していく必要があります。

(参考文献:「愛着障害 子ども時代を引きずる人々」岡田尊司著、「回避性愛着障害 絆が稀薄な人たち」岡田尊司著、「発達障害と呼ばないで」岡田尊司著)